

2014年5月大阪市会・府議会における ピースに関連する質問と回答 全記録

2014年5月に開催された大阪市議会「教育子ども常任委員会」と大阪府議会「本会議」の一般質問において、ピースおおさかのリニューアルに関し、以下のような質疑（とくに市会では維新を除く全会派による）がなされ、市・府当局から回答がされました。

これらは、やがて両議会から速記録として公表されますが、ピースにおいてこれから展示案が確定されていく過程にとって非常に重要な質問と回答であるため、急ぎインターネット録画映像から当実行委員会の責任において文字起こしをしました。

なお、配列の順序は質疑の時間的順序にしたがっています。（ ）内の数字は、各議員の質問時間全体と、文字起こしした時間的位置、その長さを示しています。さらにゴシック体の文字は、実行委員会の担当者の判断において、重要と思われる発言に加えた強調を意味します。

これらにより、私たちの運動の成果と課題を確認し、今後のためご活用下さい。

2014年6月18日

ピースおおさかのリニューアルに
府民・市民の声を！実行委員会

2014年5月20日 大阪市会・教育子ども常任委員会

公明党 待場康生議員 (全体55分のうち45:30~54:42の約9分間)

待場：次にピースおおさかの展示、リニューアルについてお尋ねしたいと思います。

4月に実施設計が発表されました。4人の監修委員の先生方を中心に項目、あらすじが示されたと思います。で、大阪空襲がメインテーマと言われますけども、**全体の総括はこの4人の先生方が行われるとしても、そのもとでパートごとの専門家、研究者に補助で入ってもらう必要が私はあると思います。**そしてその上で展示業者に託していかれると思います。

だけでも空襲展示の蓄積とかですね、資料もその展示業者が知っておられるのか、たいへん困られるのではないかと考えています。展示案を具体化するバランスのとれたワーキングチームを早急に立ち上げて内容をつめ、監修委員会で広い視野からチェックされてはどうかと思いますが、教育委員会どうでしょう。

蔵田一成（生涯学習部社会教育施設担当課長）：お答えします。戦後68年が経過し戦争体

験者が減少するなか、戦争の記憶を風化させることなく次代を担う子供たちに戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝えていく為にピースおおさかの果たす役割はますます重要になってきております。ピースおおさかのリニューアルにつきましては、公益財団法人大阪国際平和センターに設置されました監修委員会で検討を進めてまいりました。今後展示に使用する資料等につきましては監修委員を中心としました部会を設置しまして、必要に応じて専門家の意見をきくなどの方法によりまして検討することとしております。

待場：必要に応じてではなくって、常駐でさまざまな専門家をですね、要するにもう保守派の人とか市民運動派とかそういう、これは激突するんですけど、バランスのとれた研究者がおられると思うんですよ、地道に研究されておられる方が。そういう人に常時入ってもらいたいと思います。そこで実施設計のペースを見るとですね、パネルと写真の展示がやたら多い。私はこのピースおおさかが抱えておられる収蔵されている一万点以上の現物をやはり有効に活用されてはどうかと思います。実物を見るインパクトっていうのは小学生、中学生が6割～7割を占める館では大変印象に残ると思いますがいかがでしょうか。

蔵田：お答えします。実施設計では展示設計の方針のなかで戦争のあった時代を物語るものとしてもっともパワーのある当時の証言と実物を中心に展示メディアを構成することといたしております。また、実物は謂われのあるもの、メッセージ性の高いものを中心にピックアップしまして、証言と組み合わせるなどリアリティのある展示をすることとされております。ピースおおさかは来館者の6割以上が小中学生であることから展示につきましては史実に基づき、子供たちにもわかりやすく、また興味を引くことが必要であると考えております。

その為展示物につきましては、実物資料を使うことで学校での授業を一層深めることができるのではないかと考えております。「戦時下の大阪の暮らし」や「多くの犠牲者をだし、焼け野原となった大阪」のゾーン等を中心に実物資料等を駆使したわかりやすい展示としまして、次世代を担う子供たちの平和を願う豊かな心を育む拠点施設となるよう取り組むこととしております。以上でございます。

待場：展示のなかで体験型というのがあってですね、防空壕が計画されているようであります。これは音と光で体感・体験できるようにするようですけども、「ああ一怖かったな」という程度の感想で終わるアミューズメントになってしまわないか、防空壕に入っておればですね、そこで耐えておれば助かる、と誤解しないかなと思います。

私の実家も、東成にありましたけれども家の床下にも防空壕がありました。親からこの防空壕っていうのはそれぞれの家にあった、それで命を守るもんでなくて中で多くの人亡くなったのを目撃したと、命綱ではなかったと、幼いころずっと聞かされました。この防空壕はですね、体験型と言うけども、一時退避にしかすぎないということ、また空襲

の深刻さを体験者の声もきく、学びの場として工夫する必要があるかと思いますが、いかがでしょうか。

蔵田：お答えします。実施設計では多くの犠牲者を出し焼け野原になった大阪のゾーンにおいて、当時の防空壕を再現し、照明や音響などを活用した体験型の展示とすることが計画されており、イメージ図が描かれていますが、どのようなものを作るかにつきましては、引き続き監修委員会で検討しております。

防空壕には様々な形状のものがあったようでございますが、簡易な作りのものが多く、直撃弾を受けるとつぶれてしまったという話もあったと聞いております。こういった防空壕の実相について入口付近に説明を付すことが検討されており、史実を十分に学べる展示となるよう、監修委員会に伝えてまいります。

待場：防空壕を否定するものではないですけど、砲兵工廠の中にもですね、がっちりコンクリートで固めた防空壕がいっぱいあったんですが、一トン爆弾で直撃ガンガンされましたからね。皆生き埋めになったとか、死んでしまったということですね、この防空壕があれば命は助かるんやというような、子供たちに植え付けてはあかんと思うんでね、これはやはり私、工夫が必要やと思います。

待場：刻の庭というのがあるんですけども、これは大阪空襲、死没者を追悼し平和を祈念する場として刻の庭と呼ばれるスペースがあります。命へのメッセージの展示計画のようですけども、その前に空襲体験者の声もしくはビデオを流すことで、より追悼というか、祈念の思いが深まると思うんですけども、ぜひ取り入れて頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。

蔵田：お答えします。実施設計では刻の庭の前のホールで入館者が描きました平和のメッセージや絵などを展示しまして、入館者の足取りを命のメッセージとして展示することといたしております。時の庭は館内施設や企画事業と関連付け、活用することが検討されており、展示ストーリーでは「多くの犠牲者をだし焼け野原となった大阪」のコーナーの展示を見た後に刻の庭をご覧になっていただくことになっておりまして、「多くの被害者を出し焼け野原となった大阪」のコーナーでは、空襲体験者の証言映像等を活用した展示をすることといたしております。刻の庭が大阪空襲で死没者を追悼するとともに、平和の尊さに対しまして思いを致すことができる貴重な場として活用することが検討されているところでございます。以上でございます。

待場：入館者の中心であります次代を担う大阪の子供たちへ、戦争の悲惨さからさらに復興への苦勞、足跡、そして何があったとしても平和を求め抜く、その平和を考える場、そ

の対比となるのは、戦争とはいうのがどういうものであったか、それを知る場がピースおおさかの平和資料館としての、私使命やと思います。ぜひこの23年ぶりに行われる大幅展示を成功させてもらいたいと思いますが、今日は森本部長出席ですから、ぜひ決意というか、思いをお述べいただけますか。

森本充博（生涯学習部長）：大阪<の>戦前・戦中・戦後を通じまして得た教訓をもとに果たすべき役割は何か、私達1人ひとりが今できることは何かを考えて頂けるような、大阪の復興から見た平和の発信ができるような展示を考えてまいりたいと、このように考えております。さらに空襲と復興を通じてみた戦争の悲惨さ、平和の尊さを踏まえ、平和を築いていくには何が必要か、自分はどの行動すればいいのか、平和について常に想像力を広げ、学び、行動することの大切さを訴えかけられるような展示にまいりたいと、このように考えております。

待場：どうぞよろしく申し上げます。以上です。

2014年5月21日 市会・教育子ども常任委員会

自民党 床田正勝議員（全体50分のうち26:14～28:15の約2分）

床田：次にピースおおさかについてお願いいたします。ピースおおさかの展示は今回リニューアルされます。このリニューアルにつきましては、私もそうですし、自民党わが会派の方からも長年指摘をさせていただきました。それによって実現したものと我々は自負をいたしております。展示内容は大きく変わります。それは、我々からしたらこれまでのピースおおさかではなく、ある意味新たな施設、新たな博物館機能ができると考えております。新たな施設、新たな博物館機能ができるのであれば、これまでの設置理念を引き継ぐのではなく、新たな設置理念を作るべきだと考えておりますけども、教育長さんのお考えをお聞かせください。

山本教育長：お答えをいたします。ピースおおさかは展示リニューアル構想に基づき大阪空襲に焦点をあてたりリニューアルをすることといたしております。その考え方につきましては市民にわかりやすく簡潔に伝えることが必要であると考えておりますので、リニューアルに伴う考え方、いわゆる理念につきましては、できるだけ早期に作成できるよう検討してまいりたいと思います。どうぞよろしくようお願いいたします。

床田：はい、ありがとうございます。早期に作成していただけるよう、検討していただけるということでお答えいただきましたので、リニューアルまでに作っていただきまして、ここから要望なんですけれども、ぜひ新しい施設のパンフレットに、その新しい設置理念を載せていただきたいと思います。その節にはぜひね、監修委員の先生方、そのなかでも非常ご造詣の深い先生もいらっしゃるんで、影山先生はじめ…ま、影山先生につくっていただいたらどうかなと思います。これは要望しておきますので、よろしくをお願いします。

2014年5月21日 市会・教育子ども委員会

OSAKAみらい 小林道弘議員（全体50分のうち00:19-16:12の約16分間）

小林：はい。おおさか未来の小林です。よろしくお話ししたいと思います。最終日です。ほんとに連日、いろいろと資料提供も含めまして、皆さんには本当にありがとうございます。

私の方から最初に、ピースおおさか関連の質疑から入らせていただきたいと思います。まず最初なんですけどね、やっぱりもう戦後68年経っているということで、今日のこの会場のほとんどの皆さんがわたくしも含めまして、戦争体験がない、戦争のおそろしさを身をもって感じていない、その中での議論をするという、非常に難しい議論だなというふうに思っています。日本全国見ても4分の3が戦後生まれとなっているという資料もあります。だからこそ歴史資料館でありますとか平和教育の尊さというのが今大きく叫ばれる時代ではないかなと思うんです。

1つのエピソードとして、つい最近、テレビの方で、最近の大学生の少ない人数が、日本とアメリカが戦争をしたことを知らないとか、アメリカが広島・長崎に原爆投下したことを知らないとか、まあ統計的に確かな数字じゃないですけども、そういうこともあったりとかいうことで、私が思うに、戦争があった、もしくはそういう歴史的事実も大事だと思うんですが、もっと重要なのは、やっぱりなぜ戦争になったのかとか、またなぜその戦争が回避できなかったのかとか、もっと言うならば、戦争によりどういう風が変わって今現在、どんな世界なのかということをしかりと、例えば歴史のなかの事実からつかんでいくことが大切ではないかというふうに思います。

まずそういう観点から、最初にご質問したいんですが、先ほどもありました、ピースおおさかがリニューアルされます。まずそのコンセプト、そして今後の動きの予定についてお話ししたいと思います。

蔵田（教育委員会事務局生涯学習部、社会教育施設担当課長）：お答えします。平成25年3月に取りまとめられました、ピースおおさかの展示リニューアル構想では、大阪空襲の

犠牲者を追悼し平和を祈念するとともに、大阪空襲を中心にして戦争の悲惨さ、平和の尊さを次世代に伝え、平和を願う豊かな心を育む拠点としていっそう充実させるため大阪中心、子ども目線で平和を自分自身の課題として考えられる展示にリニューアルすることとしております。

この構想に基づき、昨年度は設計業務を行いまして11月には基本設計を完成させ、本年度3月に実施設計を取りまとめてまいりました。実施設計において大阪空襲の実相を伝えるスペースをおっきく取り、身近な地域に起こった空襲の事実を通しまして、戦争の悲惨さ、また戦争の背景、メカニズムを理解するとともに平和を自分自身の課題として考えることができる展示を目指しております。今後の予定といたしましては、本予算案がご承認いただけましたら、今後ピースおおさかを運営いたします公益財団法人大阪国際平和センターにおきまして、6月から施工業者の入札をおこないまして、9月から工事の為に休館し、来年4月のリニューアルを目指すこととしております。以上でございます。

小林：いま今後の流れもお答えいただきました。先ほどの質疑にもあったようにね、もう20数年前ですかねコレもともとできたんですが。ですからもう新たに建て替え、リニューアル必要やと思います。当時と今と違うと思います。けれどもやっぱりコンセプト、理念のところで少なくとも当時どういう理念であったのかということはしっかり検証していただいて、重要なことはやっぱり引き継ぐ、そして新たに今の時代に変えなければならぬところは変えていただく、そういう風にリニューアルコンセプトについては強く要望と指摘をさせていただきたいと思います。

そして2つ目なんですけれども、昨年9月に私も委員会で質疑をさせていただいています。そのときには、特に南京大虐殺の例をとりまして、このこと1つにとっても様々な意見がありますねと、例えば30万人が亡くなったという意見もあれば、いやいや5万人やという意見もある。あのとき言ったように私はそのときその場におりませんから、私はしっかりといろんな方の資料とか話を聞いて自分自身でトータルで考えていかなければならない。となればしっかりと史実、それに基づいた展示が必要ではありませんかということを行いました。

そしてもう一つは今、この委員会の現時点でも全世界ではテロで、そしてまた子供たちが鉄砲や機関銃をもって戦争・紛争に接している、このことを伝えるべきではないですかとリニューアルの際にお願いしたんですけれども、この2つは今回どう反映されるんでしょうか。

蔵田：お答えいたします。ピースおおさかの展示におきましては史実に基づき、事実を客観的に展示することを基本とし、資料については十分配慮するなど公正公平を期すこととしてしております。また「私たちの未来を創っていくために」のコーナーにおいて、いまこの瞬間にも世界各地では様々な問題が発生し平和が脅かされていることを伝え、平和の

ために私たち1人1人が今できることは何かを考えてもらうこととしております。以上でございます。

小林：ぜひやっぱり、指摘させていただいてることについてはしっかりと反映の方をお願いしたいと思います。で昨日もね、ピースおおさかの関連で他会派の方からも質疑もありました。特にその中で特化して取り上げられていた、防空壕の問題ですね。あの防空壕のことで展示するにあたって、いくつかの危惧の点も指摘をされておられました。やっぱり体験が安易な形になって子供たちがおもしろがってしまうのではないとか、ああいう安易な防空壕で本当に大丈夫なのかという、戦争が…まあ言うたら怖さとかが感じられないのじゃないかというのがありました。

ちなみに私のおばあちゃんの家はね、防空壕がありました。僕も小さいとき覚えてます。細い長屋でしたからね。一番奥の三つぐらいの部屋のところに、防空壕というよりも2メートルぐらいの洞穴でした。小ちゃいとき遊んだから覚えてるんですけどもね…ですからもしあれに玄関に爆弾が落ちたらと思うと怖いんですけども、ただ問題はその防空壕を、いわば逃げられない状態にあった法律に問題があったとも言われています。防空法ですね。

この防空法によって都市からの退去を禁止されたりとか、退去したものには懲罰があったり、また空襲、焼夷弾は怖くないんだという報道統制が行われたりとか、防空壕は空き地ではなくて床下につくるといようなことが言われているようなんですけども、今回先ほどの防空壕の展示はありますが、この防空法についてもしっかりと、今言ったような視点で言うべきじゃないとは思いますが、どうでしょう。

蔵田：お答えします。防空壕のイメージにつきましてはどのようなものを作るか、引き続き監修委員会で検討しているところでございます。防空壕の実相につきましては小さいものや大きなもの、また立派なものや簡素なものなど、いろいろなものがあつたようでございます。ピースおおさかのリニューアルに際しましては、防空壕の体験スペースの前に、これらのことを含め、当時の防空壕の実態を説明するコーナーを作ることが検討されております。また来館される方々がより空襲の実相についてわかりやすいものとするために、空襲体験者の証言映像を活用するなどにより、空襲の実相説明や、防空法の解説など、展示内容を検討するよう、監修委員会には伝えてまいります。

小林：監修委員会に伝えて頂くということです。ただまあ私もやっぱり少ししか勉強していませんので、当時の生活の実態とか、また防空法がどういう風に市民の皆さんや国民に影響を与えたのかということは、まだはっきりわかりません。けれども昨日から危惧されているようにその防空壕の展示がね、安易な形でおもしろいだけとか、体感をメインするというだけでの展示にならないように、しっかりとこれは監修委員に伝えて頂きたいと思

います。

そして今回のリニューアルの大きな点で、大阪空襲をはじめとして、ということがあるんですね。で大阪空襲は、当然大阪だけで終わってないんです。東京や全国各地に、この空襲というものはずっと行われたわけなんですけれども、結局その空襲が、空爆が1945年の広島・長崎へのあの大きな原子爆弾へとつながって、日本が戦争終結した。けれどもその空爆の、もしくはそういう戦争というのは今現時点でも最近の過去のベトナム戦争でありますとか、いろいろな戦争にやっぱりつながってきているわけなんです。

そう思えばこの展示というのも、大阪空襲を中心とするならば、もっとしっかりと大阪に起こった空爆のことも必要ではないかと思うんです。皆さんご存知のように、僕も今回初めて勉強させていただいたんですが、広島・長崎に先駆けて、その1月弱ぐらい…7月26日に大阪の東住吉区、今でいう田辺のところに模擬原爆が落とされたんですね。

でその模擬原爆を、大阪に落とすことによって、広島・長崎でホンチャンを落として、そのときにパイロットが、あれ上から見たらはがき一枚ぐらいの目標に落とすらしいんですよ。ですから高い高度からどういう形で落としたりいいのかとか、もしくは落とす途端に爆風がでるからその爆風から自分たちはどう逃げるのかとか、いうふうなことで模擬爆弾を日本全国50発ぐらい落とすという記録があるんですね。

私も今回初めて大阪で落とされたというのを聞いて、2年前にニュースの特集でやってたんですね。ネットで調べたら夕方のニュースでずっと報道されてました。当然大阪の模擬原爆が落とされて、いわば慰霊碑も建てられています。つまりこういう風なごく身近な模擬原爆、大阪にもひょっとしたらあの長崎・広島と同じような原爆でたくさんの死者が出たんだということも知らせることも必要と思いますが、この模擬原爆の展示については如何でしょう。

蔵田：お答えします。実施設計では、模擬原爆について「多くの犠牲者を出し焼け野原になった大阪」のコーナーにおいて、写真と解説を展示することとしております。また解説の中では、米軍の模擬原爆を使用した訓練を兼ねた空襲がのちの広島・長崎への原爆投下につながっていたことがわかるよう展示することが必要ではないかと考えております。

模擬爆弾の模型展示等につきましても、模擬原爆自体が非常に大きいものであったことはわかっておりますので、課題もございりますが監修委員会の方に伝えていきたいと考えております。

小林：今お答えいただいた、その大阪に落とされた模擬原爆、ですからこれおそらくみなさんも見たことあると思うんですけれども、ただこれだけやとちっさいからわかりませんね。委員長資料掲示をお願いします。

委員長：資料掲示を許します。

小林：今も現時点でピースおおさかにはその爆弾の模型があるんですが、やっぱり大阪空襲なんかは非常に小さいんですね。で今回私の関係者の方が、質疑をすれば、ぜひどれくらいかのイメージぐらい持ってほしいということで、ちょっとお願いをして作っていただいた、これが大阪の東住吉に落ちたほぼ同じ模擬原爆の…（資料を広げる）直径1.5 m、長さ約3.5 m。これがね、日本全国の50か所ぐらいに、広島・長崎の前に練習として落とされた形なんですよ。

教育長ちょっとこれ見てもらって、これ今二次元で見えますよ。もしこれがいわゆる3D、三次元だったら、これくらいの大きさのが、展示場の中に入ると、上ぐらいからせまってくるようなイメージで、例えばそこに踏み込んだ瞬間に大きなゴオオオという爆音とともに爆発するような音が出たと思えば、先ほど言ってる防空壕なんかで逃げてたとしても、助からへんなどという感覚を僕は持ったんですが、感想で結構です。教育長、3Dで見て頂いたとして、どういうイメージを持ちます？

委員長：山本教育長。

山本：議員とほぼ同じ感想を持たしていただいたと思います。

小林：蔵田課長。やっぱ大きいって言うたらわかるんです。けどね、展示は、ほんとに僕は素人ですけど、先ほど監修委員に伝えるとおっしゃいました。ぜひね、どういうことが子供たちが一番グッとくるか…もしくは海外の方々も来られますね。先ほどやりとりしただけで大阪の模擬原爆言うてもなかなかイメージ持てへんかったけれども、これが東住吉に落ちた言うだけで、なんか僕ものすごい、ああ原爆というのはそれだけ、広島・長崎の遠いところのもんちがうねんということがすごいわかったんです。ぜひこれにつきましては監修委員会にしっかりとお願いしたいと思います。

小林：最後なんです。今回の実施設計を最終案と固定せずにいろいろな人のアイデアとか調査結果などについて、もっとよく素晴らしいものにしていく必要があると思いますけど、どうでしょうか。

蔵田：お答えします。本年3月末に実施設計が取りまとめられたところですが、使用いたします実物資料や映像資料の選定などについて今後監修委員会で検討していく予定でございます。

リニューアルに関しては本市にもいろいろな意見をいただいております、内容については財団にもお伝えしております。また財団において要望等に対しましては応接等の方法によりまして意見を伺っていると聞いております。寄せられた意見・要望につきましては監修委

員会に報告しております。今後ともより良い展示となるように大阪府、財団と連携し取り組んでまいります。以上でございます。

小林：大阪市も約1億3500万円予算化しております。本当に、作るならばしっかりと、大阪市としても意見を言っていて、そして、監修委員会の方でも、より史実に基づく、そしてなおかつ臨場感のある展示へのリニューアルをお願いしておきます。

それではピースの方、終えさせて頂いて、次の質問に移らせていただきます。

2014年5月21日 市会・教育子ども委員会

共産党 小川陽太議員 (全体53分、ピースについて00:00-03:00、

リニューアルについて-26:15、約23分間)

小川：どうも。日本共産党の小川陽太です。わたくしから、まずピースおおさかりニューアル構想とそれにかかわる陳情書が多くあがってきております。それについて質疑を進めてまいりたいと思います。

これまで現行憲法のもと、戦後一度たりとも日本の兵隊が外国で人を殺す、または殺されるということなく、過ごしてきたわけであります。それを今、国政で安倍首相が憲法の解釈を変更して集団的自衛権の行使を行えるようにしよう、こういう、国での大きな動きがあります。集団的自衛権とは、海外で戦争する国になるということであり、これまでの平和主義、日本の国のあり方を根底から変えることになってしまう、そういう選択を今日日本の国民は迫られている、こういった情勢のもとでのピースおおさかりニューアル構想について、この議論となりますので、大阪から平和を発信し、日本を二度と決して戦争の道に向かわせない、こういう議論になるように、まずはじめにお願い申し上げたいというふうに思います。

さてピースおおさかについては、これまで私自身も何度か質疑に立たせていただきました。平成3年の開館以来、総入場者数は170万人を超えています。海外からの来訪者も多く、特にアジアの諸外国、国々そういったところからも、やはりピースおおさかの設置理念に見られますように、この評価は高いです。

また来館者のうち小学生・中学生、こういった児童・生徒が多数を占め、平和を学べる重要な学習施設としての役割を担ってきました。一方、大阪市の予算を見てみると、平成21年から予算の削減が続いています。予算ベースですが、平成20年度と平成26年度を比べますと20年度の4割以下にピースおおさかの予算は減っております。

今日平和博物館として、また学習施設として、さらに発展させていくことがピースおおさかには求められていると感じています。史実に基づく展示や、公文書や歴史的史料にも

とづく研究を深めていく、またここで深めた研究成果や情報を発信していく、こういう体制・役割がピースおおさかには求められていると強く感じております。こういう環境をしっかりと整えること、これが大阪市の役割ではないか、こういう前提に立って展示リニューアルに際して議論を進めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まずはじめにお尋ねいたします。ピースおおさかは、戦争と平和に関する資料、この収集、保存、整理など、これを日常業務として行っております。その中には大阪の庶民の暮らしや日常生活を通して、その当時にあった戦争、この実相が見える、そういった市民の皆さんから寄せられた貴重な実物資料や関係図書などが約42000点所蔵されていると聞いております。

しかしこの所蔵に対して、職員の体制が不十分で十分な業務にあたれていないという実態も漏れ聞いているところであります。このような状況では調査し研究を深め、そしてその成果を展示や情報発信として反映させていく、いわゆる学習施設、博物館機能、こういった使命を果たすことは難しいのではないかと、というふうに感じております。

また展示リニューアルするということですが、専門性と膨大な作業が必要であり、しっかりとした体制を整えて検討をかさねていく、こういうことが必要だと思います。お尋ねしたいのは、現在の職員体制は、こういう角度からして、十分なかどうかご説明願います。

蔵田：お答えいたします。ピースおおさかの職員体制につきましては、平成21年度から総数の変更はございませんが、収蔵品の整理や展示リニューアルの検討などを行う専門職員を、平成25年度に1名増やし2名とするなど、適切に業務が行われるように充実させてまいりました。資料の収集や整理などの業務については、専門職員を中心に行っているところでございますが、専門家の先生のご協力も得て収蔵品の整理作業を進めております。また、展示リニューアル検討作業につきましては、引き続き関係機関等との協力を得ながら、府・市も連携して取り組んでまいりたいと考えております。以上でございます。

小川：まあ、今のご答弁で1名増員で2名体制にしたと、こういうお答えでありました。しかしこの2名の実態もお聞きしますと、経験年数も非常に浅い、こういう風にもきいております。やはりこれまで予算を削りながらピースおおさかが、そのいわゆる平和博物館として力を発揮するという体制を作ったと、このことにリニューアルに関しても大きく弊害が表れているのではないかと、というふうに思います。

学芸員、博物館の学芸員に求められている役割、こういうものを政府がまとめて検討会みたいなのがあったりですね、そこから読み解きますとですね、学芸員に求められる専門性として展示資料に関する収集保管、展示などの基本的な実践技術を有すること、資料およびその専門分野における研究者として必要な知識および高度な研究能力を有すること。3番目、資料等を介してあるいは来館者との直接的な対話などにおいて高いコミュニケー

ション能力を有し、地域課題の解決に寄与する教育活動などを展開できること。4つ目、住民ニーズの的確な把握と住民参画の促進、これに答える事業などの企画、立案から評価改善まで一連の博物館活動をマネージメントできる能力を備えていること。

非常に高い能力が、やはりここの博物館、そこの学芸員に求められていると、こういう力をつけるのはもちろん非正規、こういった働き方では、身に着く時間がありません。やはり安定した、きちんとした職場環境というものが求められている。ある専門家に聞きますと、学芸員が一人前になるには10年かかると言われています。ピースおおさかのやはりこのあり方、こういうことを鑑みるとですね、中長期のしっかりした視野に立って支えていく、こういう体制が求められていると思います。

またリニューアルに向けては待場委員からも昨日の質疑であったように、パートごとに専門家が常時対応できる体制を作っていただくこと、これが要望されました。今漏れ聞く様子でありますと、パートは決まってきた、しかし常駐する専門家はいない、監修委員の方が、おっつけでここのパートを見る、しかもアルバイトの人件費は出ているけれども、そういう専門家としての監修委員、または常駐する専門家の人件費、そういった予算は全くないということもきいております。こういう体制で本当にいわゆるいいリニューアルが実現できるのか、こういう疑問を呈したいと思います。

ピースおおさかは開館の際、2年間にわたり幅広い市民が参画し検討を重ね、設置理念も定め、今の展示内容、ここに行きついたわけです。やはり今回のリニューアル構想でやはり足りない部分、それがここにあるんじゃないかと思います。公益財団大阪国際平和センターは、設置をした4人の監修委員の委員からだけ意見を聞く——意見を聞くというのは制度的にどうか仕組みでですね、しっかり聞く場所というものを設けております。

やはり開館当時のように幅広く、立場も幅広くないといけないと僕は思うんですけども、市民の意見を聞くという場、これを作ることが何よりも大事ではないかというふうに思います。そしてそこで出てきた意見をしっかり反映させる仕組みが必要だと思います。教育委員会から財団にこういった市民も参画して展示内容を決めていく、こういう場所を設置するよう進言するべきだと思いますがいかがでしょうか。

蔵田：お答えいたします。ピースおおさかにおきましては、平成24年12月から監修委員会で検討を開始し、本年3月に実施設計を取りまとめたところでございます。これまで監修委員会での検討を経て財団においてまとめました資料につきましては、適宜ホームページで広く公表しております。それに対しまして市民の皆様から財団にご意見、ご要望が寄せられており、直接市民の皆さんからお話を伺うこともあると聞いております。引き続きご意見等については、財団から監修委員に伝えて頂き、平成25年3月に作成された展示リニューアル構想に沿ってリニューアル作業を進めて頂きます。以上でございます。

小川：ホームページにアップしたら公表している、でそこに投稿されたりしたら意見を聞

いていると。これではね本当に不真面目だし、陳情の中に込められている思いっていうのはね、やっぱりしっかり受け止めなければいけないと思うんです。そのためにはやはり仕組み、そういう会議の場を設置することが求められている、必要ではないかと思います。

現在の博物館はやはり市民参加、お金出す人とそこで働く、お金もらって働く人だけでは博物館というものは成り立たない、やはり多くのサポーターって書いてましたけども、多くの関係者を作って行ってですね、多くの人に支えてもらってこそ、いい博物館になるということも書かれています。こういう方向でピースおおさかをしっかり発展させていく、そういう立場をとっていただきたいと思います。

で今回のリニューアル展示は大阪中心、子ども目線、このことが非常に強調されていますが、一体どういう意味合いなのか、わかりやすく説明していただけますでしょうか。

蔵田：お答えいたします。多くの入館者にとって地元大阪の出来事でございます大阪空襲を中心に取扱い、戦争の悲惨さを実感し、空襲に至った背景や砲兵工廠、第四師団司令部などが立地した当時の大阪の状況を知ってもらうとともに、占領期を経て焦土から復興し今につながる大阪が形成された過程を示し、平和なくして大阪の復興はなしえなかったことを知ってもらうこととしております。

また子ども目線の展示につきましては、展示物の名称の紹介だけでなく、例えば手紙であれば今の子供たちが読んで理解できるように現代語での説明をつけることや、実物展示であればそのものの説明だけでなく、なぜそのようなものがつくられたかの説明も加えること等も考えております。

展示物の説明文につきましても、学校の授業との関連性を意識しまして用語等につきましては、区内での中学校において広く使われております教科書に準拠することとしております。さらに見るだけでなく触れることのできる展示、体感できる展示としてまいります。以上でございます。

小川：先の戦争を真正面から受け止めない、方便に使っているのではないかな、と疑わざるを得ないと思うんです。大阪中心にということで、戦後の復興、このことを強調するわけではありますが、戦後もやはり戦災で苦しまれた方々、その思いを知ってほしいということで様々な証言集なども出されております。ここをしっかりと尊重すること、また貴重な多くの実物資料がピースおおさかには豊かにあります。リアリティのある展示、当時の日本社会、大阪の空気、こういったものがしっかり伝わる、そういう展示をすることで、子供たちまた来訪者たちは必ず深く考え平和への想像力を広く持つことができると思います。

子ども目線の展示として、用語は教科書に準拠したものにする、こういうご答弁がございました。この記述は実施設計の中で留意点、こういうことで示されています。その留意点の文中に「政府の統一的理解をふまえつつ」、こういう記載があるのですが、陳情書なんかでも多くの市民の皆さん、国民が疑問や心配を寄せる部分となっています。

大阪市というのは地方自治体であって、自治体とは教科書などでもそれぞれの地域はまず住民自身によって運営されるべきもので、そのために国から自立した地方公共団体を作る原則があり、このことは憲法によって保障されます。これを地方自治と言います、こういう記述があるようです。日本はかつて国の支配、ここから逃れて自由に考える行動することができない、それが泥沼のあの戦争につながっていった、そういう教訓を持つ国ではないでしょうか。だからこそ憲法では地方自治が保証されているのだと思います。

大阪市が市民の税金を投じてピースおおさかの展示リニューアルをやるわけですから、市民にも大いに参加してもらい、そして市民の立場で、そして自分たちで考えて決めた展示、これを貫くということが望ましいのではないのでしょうか。ピースおおさかの自主性が発揮されるようにする、政府の統一見解と、こういうことではないリニューアル展示となるように進めるべきだと思いますがいかがでしょうか。

蔵田：お答えいたします。実施設計では展示にあたっての留意点としまして、政府の統一の見解を踏まえつつ事実を客観的に展示することを基本とし、資料源については十分配慮するなど公正公平を期すとしておりまして、財団において展示における基本的な考え方をわかりやすくするため改めて明記したのでございます。以上でございます。

小川：あの、前段でも言いましたけど、いま日本社会が置かれている状況を踏まえて、今日は議論をしている、日本社会が本当に戦争に向かうかもしれない、こういう情勢だからこそ、過去の反省に立つ、「政府の統一見解を踏まえ」などという上を見る、お上の方をみて、そういう観点で学習施設や、こういう博物館を作るという立場はね、やはり投げ捨てなあかん、そういう立場をとってはいけないというのが歴史の教訓ではないか、というふうに思うんです。大阪独自の平和の拠点にすべき、こういう決意をもって、ピースおおさかのリニューアル構想には臨むべきだと申し上げたいと思います。

ピースおおさかは大阪空襲、大阪を中心とした展示にするということでもあります。これは大阪市として意義あることだと思います。今回リニューアル構想では B 展示で当時の防空壕の様子を再現し展示する計画となっております。この間ピースおおさか展示リニューアルについて質疑に立ち、関わっていろいろ勉強させていただきました。当時の防空法という法律で市民は大阪から逃げるのが許されなかったことや、焼夷弾による火災の消火活動が義務付けられていたことなど、また焼夷弾は怖くない、空襲など恐れるに足らないなどと政府によって情報統制され、焼夷弾の威力や空襲の恐ろしさを知らされていなかった、まあ朝の連続テレビドラマごちそうさんでもこれやっておりました。

そして私もこの勉強にあたって、この本の中で、防空法をめぐる大阪空襲訴訟というのがされたなかで、「焼夷弾は怖くない、手袋さえ持っていたら投げ返せるんだ」ということがですね、政府の発表として当時は流布されていたんです。そういう状況で防空壕についても、当初は庭や空き地に強固な防空壕、現在ピースおおさかで展示されているよう

な、ああいう梁をうった立派なものをつくること、こういう風に昭和13年くらいはされていたそうです。

しかし戦争が進んでいき物資の不足と人命よりも都市防空を優先する、こういう社会情勢にどんどんと突き進んでいって、防空壕でなく待避所と呼び、家の床下に簡易な穴を掘って設置することが原則、政府の方針として打ち出されました。「すぐに待避所から飛び出せ」、指導宣伝が繰り返されたようです。すぐに消火活動ができ、防空に努めるように強制されていた、こういう実態なんです。

防空壕は命を守るものでなく一時避難の簡素なもの、当時の防空壕に対する認識はこうであったわけです。空襲体験者からは「こんな防空壕は当時なものとは全然ちがいますよ」、こんなことを言われるような展示には絶対にしてはいけないという風に思うんですが、どのような防空壕を展示していくのか、お答えをお願いします。

蔵田；お答えいたします。防空壕につきましては、どのようなものを作るかは引き続き監修委員会の方で検討しているところでございます。実際当時の防空壕につきましてはいろんなものがあったようでございます。ピースおおさかでは、設置する防空壕のスペースの前には、それらのことを説明するコーナーをつくることと検討されています。以上でございます。

小川：これから考えるということだと理解しました。いろいろあったなどといって、実相と合わないもの、こういったものをやっぱり作ってはいけない、そういうお答えが欲しかったのですが、当時の政府の文献、防空退避施設指導要領によりますと、面積はおおむね退避者4人につき半坪、畳一畳程度、こういう文書がのこってるんですね。先ほども申し上りましたが、「こんなと違うで」と言われるような展示には絶対しない、体験者の意見をよく聞いて進めていってもらうことを強く要望したいと思います。

さて陳情書などでも多くの方が心配しているのが展示の一部が照明・音響などで防空壕の恐怖体験をさせる、アミューズメント施設の内容になっていると、こういうことが報道なんかで先行しているわけです。新聞報道などではこの防空壕、中に入ってガタガタ揺れて音がする、ぴかぴか光る、これを作るのに一千万円かける、こういう報道も聞いております。とんでもない話だと思います。これで一体どういう学習効果を期待しているというんでしょうか。お答え願います。

蔵田；お答えします。ピースおおさかの展示リニューアルにつきましては、来館者の6割以上が小中学生となっています。展示リニューアル構想では子供たちの興味をひくためには、展示物を見るだけでなく、映像、音声、光を使った立体的な表現、また体感できる展示が必要であるとされています。防空壕につきましても現在の計画では防空壕の中に入ってもらい、照明・音響を使った体感できる展示が計画されております。空襲の状況を体感

することで空襲の実相を知り、平和を自分自身の課題として考えられる展示にしてまいりたいと考えております。以上でございます。

小川：あの、音や光を使った体感できる展示は僕は必要ないのではないかと意見を申し述べたいと思います。興味をひくためということですが、入って怖かったなおもしろかったもう一回並ばかど、このようなアミューズメント施設で学習効果は生まれないと断言したいと思います。防空壕は命を守るものではなかった。死ぬことの疑似体験なんてできないんですよ。子供一人ひとりが深く考え理解して自ら判断し行動するためには、本当に起きたことがわかる、実際の経験に基づく、絵画であったり、文章、物語、想像力を育てる展示、ここを真剣に取り組むしかないんじゃないでしょうか。この体験型施設の展示はやめて頂きたいと強く要望したいと思います。

大阪空襲の悲劇を通じて、空襲や戦争の悲惨さ恐ろしさを学ぶことが展示リニューアルの目的だというご回答だったと思います。ならばこそ、世界の空襲史の中に大阪空襲を位置づけ、現代の危機につなぐ、こういった視点・観点が重要ではないでしょうか。

戦争における前線を超え、敵国の都市深く飛行機で侵入して、軍事施設・民間施設関係なく空爆をすることは、当時の国際慣習法から見ても非人道的であり、違法とされてきました。日本が重慶、これがアジアでの無差別爆撃の一番最初だと言われていますが、中国に対して戦略爆撃を行い世界中から非難をされた、これも事実であります。日本全土への空襲はその報復として行われた、アメリカが言っていると、そういう中身だそうです。そしてそれは全土での模擬原爆の実験投下、そしてそれが広島・長崎の原爆投下へとつながっていきました。大阪での模擬原爆での展示も全体の流れのなかで位置付ける、これが重要だと思います。

そしてこれは現代にもつながっている、戦後もベトナム戦争、イラク戦争など無差別爆撃へとつながっています。こういった空襲の歴史的流れがわかる、そういった展示も必要だと思いますがいかがでしょうか。

蔵田：お答えいたします。実施設計では世界中が戦争していた時代のフロアにおいて、技術や文化の発展とともに、戦車や飛行機など、近代兵器が開発され一般の人々までが被害を受けるようになったことを伝えるとしております。展示につきましては史実に基づき、事実を客観的に展示することを基本としまして、資料については十分配慮するなど公正公平を期すこととしております。以上でございます。

小川：まだ内容は決まっていない、これからだというご答弁だったのかなと思います。今後設置理念の生きた展示内容を作り上げていく、そして幅広い参加を勝ち取っていく。これがリニューアル構想成功のための一番の秘訣ではないかと強く申し上げまして、ピース

2014年5月21日 市会・教育子ども委員会

無所属 福島真治委員（全体50分のうち23:20～26:20の3分間）

福島：ピースおおさかについて一言だけ話しておきます。これね、まさに大阪空襲に特化したと、過去からシフトしましたよ、ということはそれでいいんですけど、展示の最後にね、私たちの未来を作っていくためと――。空襲はもちろん二度とあってはならないし、我々はその事実を、おっしゃるように知って、我々は平和な国づくり、平和な大阪にしていかなければならないと思うんですけどもね、しかしながら、今、一方ね、世界の紛争とかは全部、最後のパネルで出しますということですけども、今現在この国の平和を守っているのは、自衛隊であり、そしてその自衛隊の駐屯地っていうのは大阪には信太山、八尾、また伊丹というところがあります。

大阪空襲ということが今後多分想定しにくいとしても、今後何らかのことに巻き込まれる可能性はゼロではないと思うんですね。だから事実として、たとえば災害活動時、阪神淡路というのは大阪も被害を受けました。そのときに自衛隊がどのような活動をしていただいたかとか、東日本大震災、すべての日本人が復興を祈った東日本大震災のときに、大阪市の消防局も行った、自衛隊も活動した、というところ、また国際的なピースキーピングオペレーション、平和維持活動においてどのようにかかわったかということを紹介する必要もあると思いますけれども、そういった展示を、監修委員会に伝えて、実際に必要性を、事実を伝える、今後の平和を守る事実を伝える必要があると思いますが、それについてはいかがですか。

蔵田：お答えいたします。ピースおおさかの展示ストーリーでは、私達の未来をつくっていくためにというコーナーをつくることとなっております。そこでは、いまこの瞬間でも世界各地で様々な問題が発生し、平和が脅かされているということを紹介する展示が検討されております。そこでは、平和について常に想像力を広げ、考え、学び、行動することの大切さを訴えかける展示が検討されているところでございます。なお展示につきましては、史実にもとづきまして、事実を客観的に展示することを基本としておりまして、資料については十分配慮するなど、公正公平を期することといたしております。以上でございます。

福島：せっかくリニューアルするんですからね、全部で2億7千万ですから、やっぱり今の国際情勢、そして事実、そして税金をつかって今本当に平和を守って頂いているということが、どこによってこの国ではしているかということを実際通じることは必要だと思うんです。今日も床田先生からも、大阪市として委嘱式を屋上で行って、私もそういうのを

受けてますんで、やっぱりそういうことは推進する必要があるというふうに、要望しておきます。

2014年5月29日 大阪府議会一般質問
民主党 吉田保蔵議員（6:38-14:00 の約7分間）

吉田：つぎにピースおおさか展示リニューアルについてお伺いをいたします。このリニューアル事業については、施工補助金が、本年度当初予算に計上されていますが、**具体的な展示内容については、今のところまだ十分に固まっていない**というふうに聞いております。今年3月の府民文化常任委員会では、**本年9月の休館までに一定の取りまとめをするので、議会に示して意見を伺いたいと答弁をいただきましたけれども、現在の作業の進捗状況について、府民文化部長にお尋ねをいたします。**

大江（府民文化部長）：ピースおおさかを運営する財団では、本年3月末に実施設計を完成させ、現在展示リニューアル監修委員の助言を受けながら、展示ストーリーに沿った収蔵品の選び出し、写真や映像の収集、解説文や映像シナリオの素案の作成、またこれまで収集してきた空襲体験談の整理などを行っているところでございます。

吉田：今般の展示リニューアルでは、当時の防空壕を再現することが予定をされておりますけれども、大阪大空襲で被害を受けた方々からは、中間報告にある防空壕では実態に即していない、との声が上がっているというふうに聞いております。

またピースおおさかは、**小中学校の平和教育の一環で利用されることが多いと認識をいたしておりますけれども、先日、教職員の方々とお話をする機会がございました。その方々からは、体験施設は防災関係などでもたくさんございますけれども、一度に100人単位で見学に連れて行っているというようなことなので、生徒全員が体験をするということができにくい、また実感を持たせるということがなかなか困難である、それと体験をした生徒（から）事後に感想を聞くと、面白かったという感想が多く、施設の目的が、啓発を十分に理解させることが非常に難しい。このことから展示リニューアル後のピースおおさかについても、その趣旨が十分に伝わるものとなるのが、不安を感じるというようなご意見がございました。**

実施計画にそって具体的な展示内容を固める作業に入っているということですが、当時の防空壕の再現については、様々なところから意見を十分に聞いた上で、柔軟な検討を行うべきと考えますが、府民文化部長のご見解をお尋ねいたします。

大江：今般の展示リニューアルでは、大阪中心に、子供目線で、平和を自分自身の課題として考えることのできる展示とすることを目指しており、**当時の防空壕の再現も**、そのような視点からなされるべきものと考えております。子どもたちが当時の大阪の人びとの思いに少しでも近づき、大阪の戦争の記憶を未来につないでいってもらおうというのが、ピースおおさかの展示の狙いの一つであることから、**ご指摘のような様々な方からのご意見は、貴重で有意義なもの**と認識しております。

すでに財団の方にも様々なご意見が寄せられており、たとえば、防空壕というのは、爆弾の破片を一時的に避け、ただちに消火活動を行うための退避所であって、敵機が飛び去るまで入っているものとはされていなかった、そういうことがわかるような展示にして欲しい、また、中に入ったばかりに窒息死や焼死したケースもあるから、体験者の話をしっかり聞いて欲しい、といったご意見が寄せられております。

このようなご意見も真摯に受け止めながら、財団において実施設計に沿ってその詳細を検討の上、**具体の展示内容を決定すること**となりますが、府としましても、防空壕をはじめ、**展示全体にわたって、戦争の悲惨さ、平和の尊さが次世代にしっかり伝わるもの**となるよう支援してまいります。

吉田：今部長の答弁にもございましたけれども、ピースおおさかに対しては様々な意見、考え方があるというのは承知をいたしております。次代を担う子どもたちが、今の平和が多くの方々の犠牲や苦勞、努力の上にあることに思いを致して、**二度と戦争を起こしてはいけない、起こさないという平和の誓いを確固たるものにする場**、ということでは異を唱える方はいらっしゃらないというふうに思います。

今や戦後生まれが総人口の約8割、1億人を超えています。先の大戦を経験し、その記憶を語れる方は、残念なことですがもう多くはおられません。ですが戦争の記憶は平和の礎として、しっかりと後世に伝えていくことが大切です。

さいわいピースおおさかには前身の大阪府平和祈念戦争資料室のころから寄せられた多くの収蔵品があります。また大阪大空襲体験者の証言の収集保存にも努めているというふうに聞いております。こういった**実物や証言を最大限に活用してリニューアルを進め、戦争の記憶が末永く確実に伝承される展示**となるよう、お願いをいたしておきます。

了